

言頭卷

願生

学長 水谷 幸正

本年度の『あみたあば』（佛教大学学生の学生便覧）の巻頭染筆に「願生」と書いた。まさに、それを、願いをこめて書いた文字である。願生とは、言いかえれば、ほんとうの生きがい、ということになる。いまそのことを思い出しながら筆をすすめている。

はるか久遠のかなたからはじまったと言われている人類の歴史の中で、今日ほど科学技術文明の進んだ時代はなく、しかも、これから驚異的な進歩をとげるであろう、とさえいわれている。ところが一方では、今日ほどその文明の価値と意味とが根底的に問われている時代はない。いわば、科学文明に振りまわされているのか、ごとき人間存在のありようについての根源的な反省なのである。

たしかに近代の学問（科学）はすばらしい発展を上げてきたが、その背景はおおむねヨーロッパ文明に負うものが多い。哲学の体系においてもギリシャやヨーロッパ哲学がその主流をなしていたことはいなめない（い

までも西洋哲学のことを純粹哲学といっている蒙昧な学者がいる。ところが、そのような学問の中において、はたして人間存在の根源ともいふべき「いのち」の問題について解決を与えているであらうか。否である。

もういづいぶん前にかのトインビーが新しい文明論を提言した所以もここにあるし、少し視点は異なるけれども、トフラーが社会の構造的な認識から未来の衝撃や第三の波を説くにいたった基本的な問題もここにあるとみてよいであらう。

すべての人びとの営みのめざすところ、結局は人生の意味の把握にある。いのちの問題をぬきにして人生の根源を語ることはできない。総合科学としての生命科学が確立されており、分子生物学、生物物理学、分子進化学、遺伝子工学がここ十数年来まさに目を眩る発展をとげていることは周知のところである。RNA（リボ核酸）やDNAはいまや常識である。生命の根源、さらには宇宙のはじまりについての探究はより一層進むことであらう。宇宙の秩序の中に調和を保つところに人生の安らぎが与えられる。

二千数百年前、すでに釈尊は人間存在の根底を問うて、いのちの世界をいわば哲学的宗教的に解明している。縁起の思想がそれである。

願生とは阿弥陀仏の本願によって浄土（大いなる「いのち」の世界）への往生を願うことであるが、それを、願いに生きる、願われて生きる、と読みかえて、そこにこそ眞実ほんとうの生きがいがあると、『あみたあば』に解説を付したのも叙上の意味あいからである。